

推しに関する考察

推しという言葉が聞かれるようになって久しい。元来はオタク用語やネットスラングだったものであり、発端は女性アイドルグループでお気に入りのメンバーを指す語であった。しかし、昨年 2021 年にはアイドルオタク界隈を越え、宇佐美りん「推し、燃ゆ」が芥川賞を受賞し、「推し活」*1という言葉が新語・流行語大賞にノミネートされた。*2

推しの発生源はプロフィール欄

インターネットで推しについて検索を行うと、「推しとは何であるか」を説明する解説サイトなどが散見される。これは、検索エンジンのサジェスト機能でも分かる事だが、多くの人が「推し」について疑問を持っているということである。

しかし、その疑問をもつ人がインターネット検索が可能であることにも着目せねばならない。情報格差*3によって世代や志向によって利インターネット用者が大別されることを鑑みれば、インターネットが検索できる層がわからない言葉なのであり、検索エンジンで辿り着きにくいインターネット空間で発生したと考えられる。このことから、ただのインターネット用語ではなく、SNS のような従来と異なる新たなメディアから芽吹いた用語といえるかもしれない。

SNS といっても種類は多く、掲示板形式の 2 ちゃんねるなどがあった時代といま主流である Twitter や Instagram は大きく性質が異なる。それらは、コミュニティ機能やネットワーキング機能が従来のものよりも重要性を増してきていると言えるだろう*4。

このコミュニティ機能やネットワーキング機能の拡充のためにユーザーが注力するのは、恐らくプロフィール欄ではなかろうか。プロフィール欄を充実させる他に、ハッシュタグなどの投稿を充実させるなどもあるだろうが、投稿の充実にはツール習得/向上、インターフェースへの慣れ、投稿数の蓄積など多くは手っ取り早く行えない。そして恐らくこのプロフィール欄の充実こそが、推しの発生源だと筆者は考える。ここで上げたプロフィール欄にはフェイス画像やカバー画像などを含めた、プロフィールを参照した際に得られる情報全体を指す。

コロナ禍

COVID-19(以下、コロナと呼称)の蔓延により多くの娯楽が制限されたことでインターネットへの依存度がたかまったことは各種調査でも明らかになっている*5。インターネット空間でのコミュニティの最たるものが

*1 色々と派生語も誕生しているようである。推し活の具体的な活動・行動の例-TRANS

*2 NHK でも特集されており、全世代的な普及を感じるところ。“推し”こそ我が人生-NHK

*3 情報通信技術を利用できる者と利用できない者との間にもたらされる格差。デジタルディバイドとも呼ばれる。デジタル・ディバイド-外務省

*4 「インスタ映え」は 2017 年新語・流行語大賞になったが、ネットワーキング機能の誇示などの典型例かもしれない。

*5 様々あるが一部を抜粋。新型コロナウイルス感染症の影響下におけるインターネットトラフィックの推移について-総務省情報基盤局, コロナ禍で拡大したデジタル活用-総務省令和 3 年版情報通信白書

SNS であり、Zoom などのツールやノウハウに関してはターニングポイントともいえるほど大きく様相が一変した。この他にも Netflix や AmazonPrimeVideo などの動画配信サービスへの依存も急増したが、これもまた推しの対象となるコンテンツへの注力と受け取ることができる。インフラとしての SNS とインフラを流れるものとしてのコンテンツがしっかりと整備されたことで推し活が爆発的に拡散したのではないだろうか。

プロフィール欄の未定義 (undefined)

上述したようにプロフィール欄を拡充し充実させる行為の対極にあるのが空欄のプロフィールであろう。この場合、投稿した内容に余程興味をそそられる、もしくは同姓同名の知り合いがいるなどしない限り、興味をもつことにはならない。これは、現実世界でも同じだろうが、情報が限りなく削られたインターネット空間ではより情報の欠乏への忌避感情は顕著になるとと思われる。

不確実性への日本人的忌避感情

先述した忌避感情に近い部分ではあるが、サイバースペースへの強い不信感と安心志向は日本人特有であることが示唆されている (木村, 2012)*⁶。同書では「社会的信頼感の低下がオンラインへの強い不信感、不安感、高い匿名性、低い自己開示を生んでいる」としている。これらの感情はインターネットの受信者としてのプロフィール欄への注視を、発信者としてプロフィール欄の削減を迫っている。ちなみに、この感情がハンコ文化やデジタル化が叫ばれる今日の日本社会を裏打ちしているように感じなくもないのは筆者だけだろうか。*⁷

プロフィール欄に何か (=推し) を置く

日本人特有の忌避感情が受信者かつ発信者としてジレンマを引き起こしたことは先述した通りである。そのアンビバレントな (相反する考えを同時に抱く) 感情の帰結が**推し**ではないだろうか。

プロフィール欄が空欄で未定義であることを避け、敵意 (悪意) がないことを表明するため、好意の不在を否定するため、**何か**を置いた。その何かの名称が推しなのだ。「それじゃあ、自己紹介が推しなのか？」と疑問を持つ人もいるだろう。大抵の場合、自己紹介において嫌いなものを列挙していくことはない (反例があれば教えてほしい) と考えるため、推しであれば自己紹介になり得るが、自己紹介になりえない推しも存在する。よって、疑問への答えとしては「自己紹介は推しの必要条件と言える場合が多いが十分条件とはいえない」。

推しがアイデンティティではなく、アイデンティティの間接投射を推しと呼ぶ

プロフィール欄を推しと定義した以上、なぜ「推しは精神の拠り所」として表されるのかは自明である。なぜならば、「精神の拠り所の名称が推し」だからである。アイデンティティ (=「自分は何者なのか」という概念) の出力先がプロフィール欄であるので (そうでなければ意味がない)、推しがアイデンティティであることも何ら問題はなく、むしろ至極全うな現象といえよう。

アイデンティティ -> プロフィール欄 = 推し

*⁶ 木村忠正, 2012, 『デジタルネイティブの時代なぜメールをせずに「つぶやく」のか』, 平凡社, pp.224-240, ISBN:978-4-582-85660-6

*⁷ 引用元のデータが 10 年近く以前のもので昨今の情勢を反映していないというご指摘もあるだろうが、手身近にあった書籍であっただけなのでご容赦願いたい。

好きの定義

では、推しと好きの違いはどこにあるのだろうか。まず、好きという感情の定義から行っていく。

好きは名称未定義な好意の総体

好きという感情を「名称 (憧憬、愛情、親近感…) 未定義な好意的な感情の総称」と定義する。つまり、好きという感情は、好意的な (≒快) 感情のうち” 名称が定義された感情の補集合” によって定義される。言い換えれば好きという感情の名称は「名称未定義の好意」となる。ここに関しては異論の余地はないのではないだろうか。というのも、好きという記号で表される以上、それ以外の記号ではないのであり、「言語には差異しかなく、意味はその差異によって否定的に決定される」というソシュールに沿っている。ただし、その差異の中でも名称のついていない好意と名称のついていない好意の複合などに関してはひとまとめにしている。

推しは好きの殿堂入的存在

上述したような好きを定義した場合、推しは好きの殿堂入的存在だと定義できそう。そもそも好きという感情が補集合であるため、好きという感情が憧憬や親近感など他の単一の好意的感情に昇華しうる。また、昇華はせずとも、流動性が減った結果、何らかの感情と何らかの感情の論理積や論理和などからなる集合などと未定義ではなくなる場合もある。

その様々な変動が起こりうる好きという感情が向けられる対象のなかで、変動に依らず不動の地位を築いたものが、好きの上位存在として「推し」になると考える。これは、好きと同列のままにしておく、他の好きの感情が向けられる対象との差異を見いだせなくなるからであり、この差異を付けたいという意味こそが推しを生む原動力かもしれない。そのことは多くの読者に受け入れられる箇所だろう。なぜなら、推しと好きは違うのだから。

好き (=推し) には” null” が混入する

この定義によってある問題が発生する。相手の好きと自分の好きが同一ではないことだ。これも定義上当然であり、好きに関してはある特定の实体に対する名称ではないことによる。プログラミングにおける” null” のような” 意味のないもの” も補集合に含まれる。この場合、推しが重なって熱く語られた結果、相手の熱意を持って余す状態になる。この” null” も含めるという存在が現実世界ではまず観察されえない現象である。まず、”意味を持ち合わせない” という意味をもつオブジェクトやまだ定義されていない何かという意味を持つオブジェクトの存在は現実世界で起こりえないバグであり、現実世界で通常は意味と存在が同義的に存在する。ただし、心理的感情やプログラミングなどの抽象的な概念を扱ううえでは現実世界の概念メタファーが上手く作用しない場合が多い。

■コラム: “undefined” と” null” と” 0” プログラミングにおいて変数には個別に (1) 名称を付け (2) 値を代入して使用する。この動作のうち、(1) 名称付け のみ行い、(2) 値を代入していない変数を参照すると” null”

となる。つまり、「定義は行っているが何のデータもない」状況になる。また、(2) 値を代入するときに” 0” を代入すると参照した変数は当然” 0” を返す。そして、(1) の名称付けも行っていない場合、参照された変数は” undefined” を返すことになる。

ここの文脈で使用する” null” は無意味を示す記号といえ、“不在を否定する役割”がある。不在の否定は必ずしも存在とは限らないことに注意。“0” は” 0 という値が存在している”ということになる。

なお、厳密な定義はプログラミング言語によるので、これを参考にプログラミングをすることはオススメしない。あくまでアナロジーとして扱っていただきたい。

推しに理由がなく、生活の基軸なのは自明

以上のように「推し」に関する考察を語ったわけだが、推しに理由がなく、生活の基軸となっている現象を包括して定義が出来たのではないだろうか。推しの理由が知りたくて生活の基軸となることに理由を見つけたかと思っていた読者の方には大変申し訳ないが、この現象を包括するように定義づけしているため、その問いに回答することはここでは行えない。ただ、このように包括することで、「沼にはまる」*8「好きって絶望だね」*9といった言語表現をも同時に包含できたことは、予測していなかったため、ある種の達成感を覚えている。なお、誠に面白くない駄弁に始って下らない饒舌に終る*10 ことになったが執筆時の筆者の見解であり、現在の見解とは異なる場合があることにご了承願いたい。以下、その疑問に対する筆者の答えを改めてまとめて末筆とする。

推しに理由がないのは、推しの源流である好きという感情が名称未定義の好意の総称だからである。つまり、好きに理由が出来てしまえば、それは好きで呼称する必要性を同時に失うことになるのであり、これは推しにもそのまま当てはめることができる。

そして生活の基軸となるのは、プロフィール欄という文化が自己揭示を求め、その自己揭示の名称が推しであるためだろう。背景には好意の不在を否定するネット文化など様々な要因が考えられるが人々は推しをもとめ、それが翻って、希求の対象の名称を推しとしたことで爆発的に分布が広がったといえるだろう。

自己紹介

情報系の学生ではあるが、プログラミングはあまり得意ではない。餅は餅屋に任せ、認知科学*11をフィールドに学生をさせてもらっている。社会学(社会意識、公共性)や、言語学(語用論)などをつまみ食った結果、喉に詰まらせ体調不良になる日々。最近はまちづくりスタッフの末席で地域コミュニティを学ぶ。

[余談] 先日、話題に困った挙句に飲み席で上述のような私的見解を滔々と語る暴挙に及んだ。友人のリアクション「彼女がいなのは君にも非があると思う」。

*8 ゲームやアニメなど何かにどっぷりとハマってしまうという意味で使われるネットスラング。沼にハマってきいてみた-NHK という番組もあるので、割と浸透したスラングといえそう。

*9 わかる人はニヤついたかもしれないけど? 人向け-Google 検索

*10 引用-青空文庫

*11 認知科学ってなんだ? って思った人へ認知科学とは -日本認知科学会